

本郷Ⅰ遺跡発掘調査報告書

ーファストフード店建設に伴う事前発掘調査ー

2011年3月

愛媛県西条市教育委員会

序

道前平野の北部に位置する周布地区は、平成 11 年の今治小松自動車道のインターチェンジ開設以降、周辺の開発行為が盛んに行われてきた地域です。その結果、多くの埋蔵文化財が地下に眠っていることが確認され、古くは弥生時代から地域の中心地として栄えていたことが明らかとなってまいりました。

今回の発掘調査も、開発行為に伴う事前発掘調査として実施し、小規模な調査区ではありましたが、古墳時代後期の遺構や遺物を確認しています。

また、開発工事対象範囲の大部分は、工法の変更等により、未調査の状態で見地保存されています。これも文化財保護に対する成果の一つであります。

これらの成果が、今後、地域の歴史研究や文化財保護の啓発活動に生かされることを願っております。

最後になりましたが、調査に対し、ご理解とご協力を賜りました市民の皆様をはじめ、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

西条市教育委員会
教育長 田中 明

例 言

1. 本書は、西条市教育委員会が平成21年度に西条市周布で実施した、本郷Ⅰ遺跡の調査報告書である。
2. 現地発掘調査は、渡邊芳貴が主体となり、岩崎晃彦、直野正和の3名で実施した。
3. 本書に使用した座標系は世界測地系であり、方位は座標北を示す。
4. 本書における土層の色調及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』（農林水産省林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
5. 遺物の実測は渡邊、田中いづみが行い、トレースは渡邊が行った。
6. 調査で出土した遺物と記録した図面等は、西条市教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆及び編集は、渡邊が担当した。

目 次

第1章 遺跡の概要と環境	1
第1節 本郷I遺跡の位置	1
第2節 調査の経緯	1
第3節 本郷I遺跡周辺の地理的環境	4
第4節 本郷I遺跡周辺の歴史的環境	5
第2章 各地区の調査概要	7
第1節 1区	7
第2節 2区	11
第3節 3区	12
第3章 総括	15

図・写真・表 目次

図1-1 本郷I遺跡位置図1	1	写真2-1 1区遺構検出状況	8
図1-2 本郷I遺跡位置図2及び周辺の主要道路	2	写真2-2 1区遺構完掘状況	8
図1-3 本郷I遺跡位置図3	3	写真2-3 1区南西壁断面	8
図1-4 本郷I遺跡調査区配置図	3	写真2-4 1区SD1断面(南西壁)	8
図2-1 1区全体図	7	写真2-5 1区SD1断面(南東壁)	8
図2-2 1区土層断面図	8	写真2-6 1区SD1遺物出土状況(南東から)	8
図2-3 1区SD1出土遺物	9	写真2-7 1区SD1出土遺物	9
図2-4 1区SD3出土遺物	10	写真2-8 1区SD3出土遺物	10
図2-5 1区3層出土遺物	11	写真2-9 1区3層出土遺物	11
図2-6 2区平面図	11	写真2-10 2区遺構検出状況(北東から)	12
図2-7 2区土層断面図	11	写真2-11 2区遺構完掘状況(北東から)	12
図2-8 2区出土遺物	12	写真2-12 2区出土遺物	12
図2-9 3区平面図	13	写真2-13 3区遺構検出状況(北東から)	13
図2-10 3区土層断面図	13	写真2-14 3区遺構完掘状況(北東から)	13
図2-11 3区出土遺物	13	写真2-15 3区出土遺物	13
写真1-1 調査前の状況(北西から)	4	表2-1 遺物観察表	14
写真1-2 藍機による表土剥ぎ取り状況	4		

第1章 遺跡の概要と環境

第1節 本郷I遺跡の位置

本郷I遺跡の絶対位置は、遺跡の中心で北緯33度54分49秒・東経133度04分48秒であり、愛媛県西条市周布731番1に所在する(図1-1)。

本郷I遺跡は、愛媛県第2の規模を誇る道前平野の中央に位置する。道前平野は、中山川やその支流及び大明神川などの河川からなる典型的な沖積平野であり、平野中央から北部にかけて古くから人々の活動痕跡が見受けられる。当遺跡は、中山川の左岸に位置し、その支流である崩口川に近接する。



図1-1 本郷I遺跡位置図1

第2節 調査の経緯

1 調査に至る経緯

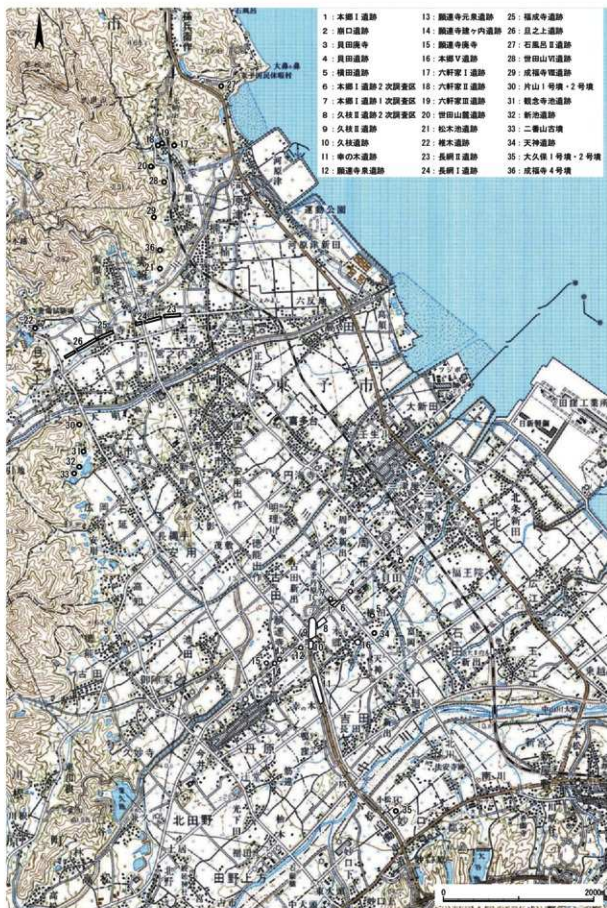
平成21年6月、事業者から西条市教育委員会(以下、「市教委」と標記)に、当該地区におけるファストフード店出店計画に伴い埋蔵文化財包蔵地の照会があり、開発工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地「本郷I遺跡」内に含まれることが判明した。対象地の遺跡の広がりについては、平成11年度に照会地の南東側で県道拡幅工事に伴う発掘調査を財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施し、古墳時代後期から古代にかけての遺構を確認している(図1-3)。そこで、今回はその成果を参考として、対象範囲全体に遺跡が広がるものと判断した。

これを踏まえ遺跡の保護について、事業者と協議を重ねた結果、当初の工法を変更してできる限り遺跡を保護できる工法を採用することとなった。しかし、依然としてやむを得ず遺跡の保護が図れない場所もあったため、改めて協議を実施した上で、文化財保護法第93条に基づき、事業者から平成21年11月20日付けで、「周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等届出書」の提出があった。これに対し愛媛県教育委員会から、平成21年12月7日付け「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(指示)」により、遺跡を保護できない範囲について発掘調査の指示があった。この指示を受け、事業者と再度協議を行い、平成21年12月14日から現地発掘調査を開始した。

2 調査の経過

現地調査に先立ち、平成21年12月10日に調査予定地に基準杭を設置した。なお、調査区は3区に分け、工事対象範囲中央やや西に位置するものを1区、南東の県道側西部に位置するものを2区、東部に位置するものを3区とした(図1-4)。

現地調査初日の12月14日には、まず重機を用いて表土の剥ぎ取りを行い、遺物包含層を検出した。これらの作業は、午前中には終了し、その後人力による包含層削削と遺構検



(この地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図(西条)を使用したものである。)

図1-2 本郷I遺跡位置図2及び周辺の主要遺跡 (S=1/50000)



図1-3 本郷I遺跡位置図3 (S=1/10000)

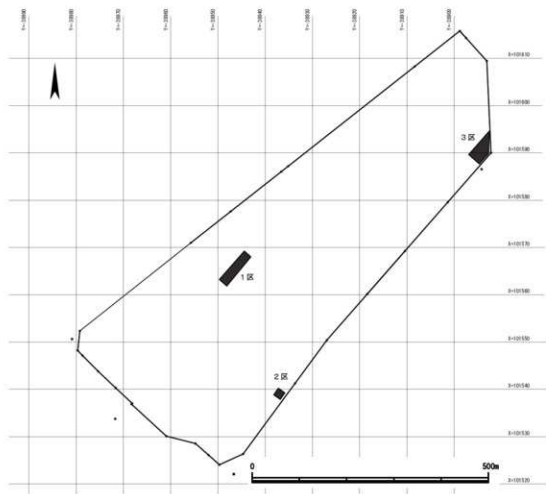


図1-4 本郷I遺跡調査区配置図 (S=1/800)



写真1-1 調査前の状況（北西から）



写真1-2 重機による表土剥ぎ取り状況

出作業を開始した。調査の進行については、1区に比べ2区・3区が狭小であることから、1区と並行しながら2区の調査を実施し、2区の調査終了後は、1区と3区の調査を並行して実施した。

調査の結果、すべての調査区で古墳時代後期と考えられる土器片が出土すると共に、1区では溝状遺構、2区では小穴、3区で溝状遺構を検出した。

現地調査は、12月17日に終了し、翌18日から室内で出土遺物の洗浄・注記作業を行なった。

3 調査体制

事務局の体制は、以下のとおりである。

役 職	平成21年度（現地調査）	平成22年度（整理作業）
教 育 長	田中 明	田中 明
管 理 部 長	戸田 秀夫	伊藤 富士夫
社 会 教 育 課 長	阿藤 浩造	渡部 純三
歴 史 文 化 振 興 係 長	三浦 執	三浦 執
歴 史 文 化 振 興 係 主 査	岩崎 晃彦	岩崎 晃彦
歴 史 文 化 振 興 係 主 任	渡邊 秀貴（調査担当）	渡邊 秀貴（整理担当）
歴 史 文 化 振 興 係	直野 正和	

作業員：田中いづみ・日野敬三・横重信・村上修二（50音順）

第3節 本郷I遺跡周辺の地理的環境

愛媛県西条市は、愛媛県の東部地域に位置する。市の南部は西日本最高峰の石鎚山を主峰とする石鎚山系、また西部は高縄山系の山々を背後に控え、それらの山系を水源とする河川により形成された県下第2の規模を誇る道前平野を有する。また、平野の北部は登灘に面する。

今回調査を実施した周布地区は、平野の北西部に位置し、遺跡は石鎚山系を水源とする中山川及びその支流により形成された扇状地上に存在する。

第4節 本郷Ⅰ遺跡周辺の歴史的環境

本節では本郷Ⅰ遺跡を取り巻く歴史的環境として、道前平野北部の遺跡の状況を述べていく。

1 旧石器時代

本遺跡の所在する周布地区を含め道前平野北部では、旧石器時代の遺構・遺物は発見されていない。

2 縄文時代

最も古い人類の痕跡としては、早期の遺物が椎木遺跡(22)や世田山麓遺跡(20)、六軒家遺跡群(17～19)など、平野北部でも北端に近い丘陵部で発見されている。また、遺構では、福成寺遺跡(25)で検出された落とし穴と考えられる土坑が、この時期のものとなる可能性も指摘されている。しかし、続く前期の遺跡は現在のところ確認されておらず、中期に至っても世田山Ⅵ遺跡(28)や六軒家遺跡群から遺物が出土しているのみで、安定した遺跡の広がりがみとめられるようになるのは後期に入ってからである。後期の遺跡としては石風呂Ⅱ遺跡(27)、世田山遺跡群、椎木遺跡、松木池遺跡(21)などを挙げるができるが、依然として北部の丘陵部を中心とした分布を示す。晩期では、福成寺遺跡及び旦之上遺跡(26)で、土坑が検出されている。

3 弥生時代

弥生時代前期は、これまで明確な遺構が確認されておらず、観念寺池遺跡(31)、横田遺跡(5)、天神遺跡(34)等で遺物が出土しているのみであったが、近年の調査で遺構も確認されてきた。福成寺遺跡では住居跡が、成福寺Ⅶ遺跡(29)では土坑や溝が検出され、土坑からは有柄式と考えられる磨製石剣が出土している。しかし、これらの遺跡の分布は依然として、平野北部の丘陵を中心としたものである。

このような状況が中期には一変して、遺跡数が急増し、縄文時代以来の丘陵周辺部(椎木遺跡、天神遺跡、新池遺跡等)に加え、平野部でも遺跡が確認され始める。本郷Ⅰ遺跡の周辺に目を向けると、久枝Ⅱ遺跡(8・9)を中心とした大規模遺跡群の存在が際立つ。なお、久枝Ⅱ遺跡は、模倣・搬入土器や武器形石製品の存在、特定区画域の存在と居住域や祭祀領域の選定等の特殊性から当地域の中核遺跡と評価されている。

4 古墳時代

集落は、前期では久枝Ⅱ遺跡や本郷Ⅰ遺跡Ⅰ次調査区(7)で住居跡が検出されている。中期には明確な遺構は確認されていないが、後期になると北部の長網Ⅰ・Ⅱ遺跡(23・24)や福成寺遺跡で大規模な遺構が出現する。また、今回調査地に南接する本郷Ⅰ遺跡Ⅱ次調査区(6)や久枝遺跡(10)では、後期から古代にかけての遺構が検出されている。

墳墓は、弥生時代後期末～古墳時代初頭とされる成福寺4号墳(36)や、同じく出現期の前方後円墳と考えられる大久保1号墳と円墳の大久保2号墳(35)が確認されている。中期では、上市地域の丘陵部に片山古墳群(30)や二番山古墳(33)などが存在する。後期になると、北部の丘陵根根を中心とする多くの古墳群が営まれる。

5 古代

本郷Ⅰ遺跡周辺は、古代の「周敷郡」に属する。本遺跡の北西に位置する久枝Ⅱ遺跡の調査では、周敷郡衙関連施設の可能性がある遺構が検出されている。また、久枝遺跡に近接する幸の木遺跡(11)でも8～11世紀の遺物が多量に出土している。

6 中世

当平野を囲む山間部や丘陵部には、他地域同様に多くの中世山城が築かれている。また平野部でも、久枝遺跡や願連寺遺跡群(12～14)などで集落跡が確認されている。さらに本郷Ⅴ遺跡(16)では、中世の集落が確認されていて、当地域では貴重な例である井戸も検出されている¹⁾。

《参考文献》

- 東予市誌編纂委員会編 『東予市誌』東予市 1987
- 柴田昌児他編 『幸の木遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002
- 柴田昌児他編 『大久保遺跡・大久保1号墳』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002
- 柴田昌児他編 『久枝遺跡 久枝Ⅱ遺跡 本郷Ⅰ遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005
- 西川真美他編 『願連寺泉遺跡2次 願連寺元泉遺跡 願連寺建ヶ内遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005
- 松村さを里他編 『世田山4号墳・成福寺Ⅷ遺跡・成福寺3・4号墳・松木池遺跡・長網Ⅰ遺跡2次』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007

注1 本郷Ⅴ遺跡については、西条市教育委員会が平成20年度に実施し、現在整理作業中である。

第2章 各地区の調査概要

第1節 1区

北西-南東に長軸をもつ8×2mの調査区である。現地は休耕田であり、水田に伴う層(1層:旧耕作土、2層:床土層)が上部に堆積する。3層は、オリーブ褐色(2.5Y4/4)のキメ細かな粘質土層で、古墳時代後期の遺物を含む包含層である。3層は、調査開始当初、調査区東部で検出した。その後、この層が調査区全体に広がる可能性を考え慎重に調査を行ったところ、掘り下げを進めると調査区南西部には3層が存在せず、2層の下に4層が現れることが明らかとなった。そこで、まず北東部に堆積する3層部分を掘り下げて、調査区全面で4層(細砂混じりの粘質土層)を検出した段階で精査を行い、この面で北西-南東に長軸をもつ溝を3条検出した(図2-1)。5層は、5cm程度までの川原石を含む砂質土層で、下部にいく程、砂の割合が高くなる。このような状況から、5層は旧河川の氾濫に伴う層である可能性が高い。

以下、遺構ごとにその特徴と遺物について説明していく。

1 溝状遺構(SD1~3)

(1) SD1

遺構(図2-2・写真2-1~6)

溝は幅80~95cm前後で直線的に伸び、深さは検出面で約30cmを測る。両端が調査区外に続くため全長は不明であるが、3条の溝の中で最も規模が大きい。また、出土物の中に3層出土物として取り上げた遺物と同一個体のものが含まれることから、本来はもう少し上面まで遺構が残っていたものと思われる。溝の埋土はキメの細かい粘質土で、3層に比べ若干砂が混じる。また、単一層であることから、比較的短

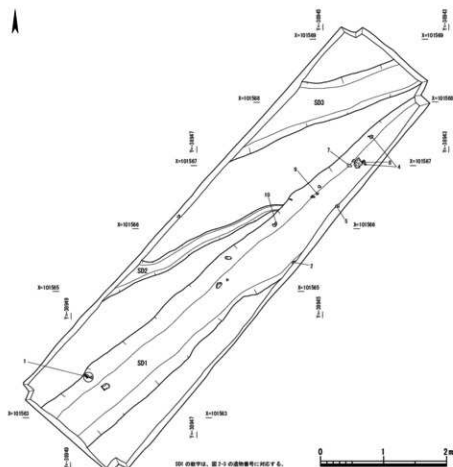


図2-1 1区全体図(S=1/60)

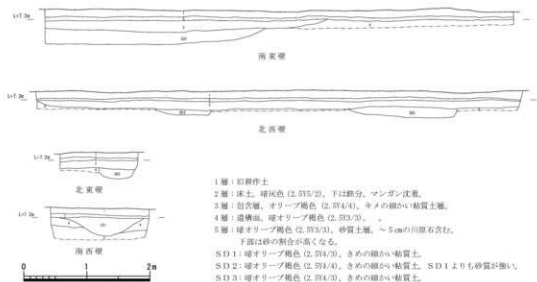


図2-2 1区土層断面図 (S=1/60)

期



写真2-1 1区遺構検出状況 (北東から)



写真2-2 1区遺構完掘状況 (北東から)



写真2-3 1区南西壁断面



写真2-4 1区SD 1断面 (南西壁)



写真2-5 1区SD 1断面 (南東壁)



写真2-6 1区SD 1遺物出土状況 (南東から)

間で埋没したものと考えられる。

なお、遺構は、後述する遺物の時期が6世紀末～7世紀初頭を示すことから、この時期に埋没したものと考えられる。

遺物（図2-2、写真2-7）

1～5は、土師器である。

■（1・2） 1は、口縁部から胴部境にかけての破片である。口縁部は、わずかに内湾しながら立ち上がり、端部は面を持つ。外面はヨコナデ、内面はヨコハゲが施される。2は、口縁・胴部境の屈曲部の破片と考えられる。

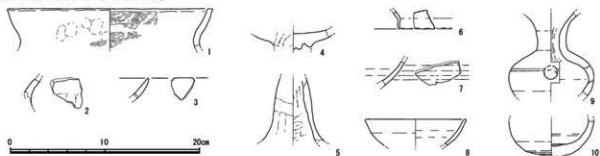


図2-3 1区SD1出土遺物 (S=1/4)



写真2-7 1区SD1出土遺物

坏もしくは椀(3) 3は口縁部片である。口縁は緩やかに内湾しながら立ち上がり、端部は先細りする。

高坏(4・5) 4は坏底部の破片で、外面には脚部との接合痕を明確に確認できる。調整は磨滅のため不明であるが、外面には指押さえの痕跡が残る。5は脚部片である。筒状の脚部は、上方に向けて次第にすばまり、下方は脚部に向けて緩やかに広がる形態をなす。内面には、ヨコ方向のケズリが施される。

6～10は、須恵器である。

坏蓋(6) 6は、坏蓋の口縁部片である。口縁先端部は先細り、内面の段はみとめられない。

坏もしくは椀(7・8) 7は、体部片で、口縁部に向かい緩やかに内湾しながら立ち上がる。8は、口縁から体部にかけての破片である。体部は口縁部に向け緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く納める。無蓋高坏の坏部の可能性も考えられる。

甕(9・10) 9は、甕の頭部から胴部にかけての破片である。胴部最大径は胴中位にあり、復元径9.6cmを測る。また、この位置に穿孔がなされる。さらに、この最大径部の若干上部に1条の沈線が施される。10は、甕の底部片である。9・10は、同一個体となる可能性が高い。

(2) SD2

遺構

SD2は、南西-北東に長軸をもち、南西から北東にかけ溝幅が狭まる。幅は北壁付近で幅25cm前後、SD1付近で約8cmとなり、深さ8cm程度の小さな溝である。埋土は、キメの細かい粘質土であるが、SD1に比べると砂の混じりが多い。SD1に切られる。

遺物

遺物は、土師器小片が出土したのみであり、図化できるものはない。

(3) SD3

遺構

SD2の北側に位置し、SD2同様に南西-北東に長軸をとる溝である。幅は50～70cm前後で、北東側に向け若干先細る。深さは、検出面から約20cmを測る。埋土は、きめの細かい粘質土に砂粒が混じりもので、SD2に類似する。なお、遺構の埋没時期は、出土遺物が土師器片のみであるため詳細を検討することは難しいが、古墳時代後期の可能性がある。

遺物(図2-4、写真2-8)

1・2は土師器の甕である。ともに口縁部片で、先端部は丸く納められる。

2 その他の遺物(図2-5、写真2-9)

1区では、3層からも遺物が出土している。なお、SD1出土遺物に3層出土遺物と接合した資料があることから、3層として取上げている遺物の一部は、本来SD1に含まれる可能性がある。

1は、土師器の高坏である。坏底部と脚部の接合部付近の破片である。



図2-4 1区SD3出土遺物(S=1/4)



写真2-8 1区SD3出土遺物

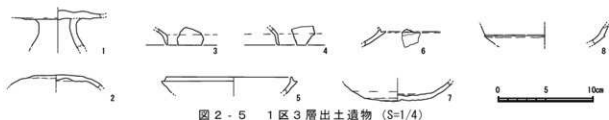


図 2 - 5 1区3層出土遺物 (S=1/4)

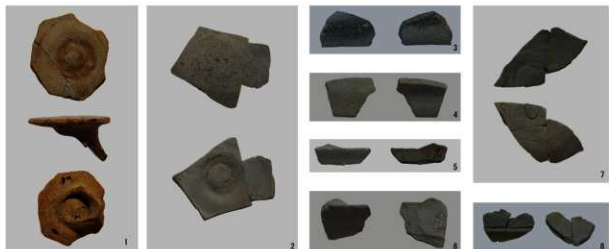


写真 2 - 9 1区3層出土遺物

2～8は、須恵器である。

坏蓋 (2～4) 2は、天井部片である。天井部外面には、ヘラケズリが施されるが、その範囲は狭い。3・4は、口縁部から天井部にかけての破片である。天井部と口縁部の境には、緩やかな稜線が入る。また、ともに口縁単部はやや先細りするが、4は、3に比べ若干器壁が薄い。

坏身 (5～7) 5・6は坏体部から受け部にかけての破片である。ともに受け部幅は狭く、立ち上がりは受け部より高くなるものの、その高さは低い。7は、坏底部片である。底部外面には、回転ヘラケズリが施される。

高坏 (8) 8は、高坏の坏部片である。坏部から口縁部へかけての変換点に、1条の沈線が施される。

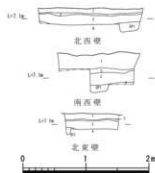
第2節 2区

2区は、工事対象地区の南東隅付近、看板の基礎埋設予定

地に設定した。当初、1.7×1.7mの規模で設定したが、調査区南東側に道路の擁壁が接することから規模を縮小して調査を進めた。1層は旧耕作土、2層は床土層で、これらは現代の水田に伴う層である。3層は、灰オリーブ色(5Y5/2)のキメ細かな粘質土層で、古墳



図 2 - 6 2区平面図 (S=1/60)



1層：旧耕作土、黒褐色(5Y3/2)。
2層：床土、オリーブ褐色(5Y5/2)。
3層：粘質土、灰オリーブ色(5Y5/2)。
調査に用いた土の層は、
1層：粘質土、黒褐色(5Y3/2)、キメの粗い砂質土。
2層：粘質土、灰オリーブ褐色(5Y5/2)、やや粗い砂質土。
3層：粘質土、黒褐色(5Y3/2)、やや粗い砂質土。
S P 1：オリーブ褐色(5Y5/2)、やや粗い砂質土。
S P 2：S P 1同層、上部破片。

図 2 - 7 2区土層断面図 (S=1/60)



写真 2 - 10 2区遺構検出状況（北東から）



写真 2 - 11 2区遺構完掘状況（北東から）

内面に段はみとめられない。3は、坏身の体部から受け部にかけての破片である。受け部は短くなり、立ち上がりも低い。4は、壘の頸部片である。外面に1条の沈線が施される。

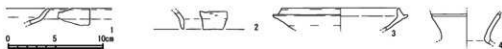


図 2 - 8 2区出土遺物 (S=1/4)



写真 2 - 12 2区出土遺物

時代後期の遺物を含む包含層である。4層は、暗黄色 (2.5Y4/2) のキメの細かい砂質土である。4層上面で遺構を検出した。

1 遺構 (図 2 - 6・7、写真 2 - 10・11)

4層上面で、調査区の南西端と北東端で計2基のピットを検出した。2基ともに調査区の外まで広がるため、遺構の規模は不明である。また、ピットから、時期の特定できる遺物は出土していない。

2 遺物 (図 2 - 8、写真 2 - 12)

表土及び3層から須恵器片が出土している (1～3：3層、4：表土)。

1は、土師器高坏の坏部片である。口縁部は、浅い坏部から大きく外傾する。口縁端部は丸く納める。

2～3は、須恵器である。

2は、坏蓋の口縁部片である。単部はやや先細りし、

第3節 3区

3区は、工事対象地区の北東隅付近に位置し、2区同様に看板基礎の埋設予定地である。耕作土 (1層)、床土層 (2層) 及び遺物包含層である3層を除去した段階で、遺構面 (4層) を検出した。この4層上面で北西 - 南東方向に伸びる1条の溝 (SD 1) を確認した。また、平面精査の段階では確認できなかったが、遺構面の最終確認のために調査区南西壁沿いを断ち割った際の断面観察で、ピットの存在を確認した。

1 遺構 (図 2 - 9・10、写真 2 - 13・14)

(1) 溝 (SD 1)

SD 1は、幅 20～30cm で直線的に伸びる溝である。深さは 17cm と浅い。埋土は、キメの細かい黄褐色砂質土である。なお、埋土中から遺物は、出土していないため、時期は特定できない。

(2) ビット (SP1)

南壁分割の際に、1基のビット(SP1)を確認した。遺物が出土していないため、時期は不明である。

2 その他の遺物 (図2-11、写真2-15)

3層から、須恵器坏蓋の天井部片が1点出土している。

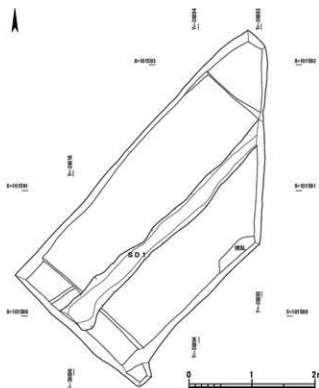


図2-9 3区平面図 (S=1/60)



写真2-13 3区遺構検出状況 (北東から)



写真2-14 3区遺構完掘状況 (北東から)

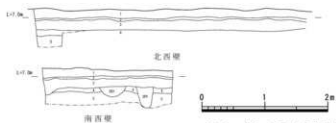


図2-10 3区土層断面図 (S=1/60)

- 1層：耕作土。
 - 2層：凍土。
 - 3層：白土層、灰オリーブ色 (2.0/5/2)、
きめ細かくしまりのある砂質土。
 - 4層：灰褐色 (2.0/3/2)、きめ細かくしまりのある
砂質土、凝集土。
 - 5層：灰黄色 (2.0/6/2)、4層に比べ砂の割合が多い。
- S D 1：黄褐色 (2.0/5/4)、きめ細かい砂質土。
S P 1：オリーブ褐色 (2.0/4/2)、砂質土。

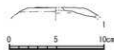


図2-11 3区出土遺物 (S=1/4)



写真2-15 3区出土遺物

表2-1 遺物観察表

図番号	出土場所	種別	出土番号	図解	部位	位置 ()は測定位置	色調	文様・調整・加工等の特徴
図2-3-1	1区50	土師器	F1	壺	口縁部	口径21.8	内：明赤褐色 (L, 0101/4) 外：明赤褐色 (L, 0101/4)	外面はコナダ、内面はコナダ。口縁部は面を待つ。
図2-3-2	1区50	土師器	F3	壺	底面	底径3.1	内：紅い褐色 (L, 0106/2) 外：紅い褐色 (L, 0106/1)	外面には何らの加工も施されていない。調整のため磨削不明。
図2-3-3	1区50	土師器		耳付してはね	口縁部	口径2.2	褐色 (L, 0108/4)	口縁内面はゆるやかにくぼむ。コナダ。～2mmの長さ・6角を多く含む。赤鉄をまばらに含む。
図2-3-4	1区50	須恵器	F11 + F12	高杯	杯底	底径2.4	褐色 (L, 0106/3)	赤鉄の点線しているが、外面には磨削さとの痕跡がある。
図2-3-5	1区50	須恵器	F16 + 3類	高杯	脚部	底径6.6	内：褐色 (L, 0106/4) 外：紅い褐色 (L, 0106/1)	内面は、横方向のケズリと上部に放射状の痕跡。外面は4mm程度の磨削あり。ヘラ加工を施して平らな。
図2-3-6	1区50	須恵器		杯蓋	口縁部	底径1.9	灰色 (S6)	口縁部には光輝りするが、やや大きくおきめらぬ。磨は磨きない。コナダ。外面部赤鉄より上は、ナダの面にケズリ。
図2-3-7	1区50	須恵器	F10	耳付してはね	杯底	底径2.6	灰色 (S6)	内外面ともに同様にコナダ。
図2-3-8	1区50	須恵器	F16	耳付してはね	口縁部	口径16.8 底径2.9	内：灰白色 (S7) 外：灰色 (S6)	内外面ともに同様にコナダ。
図2-3-9	1区50	須恵器	F1 + 3類	脚部 脚部最大径9.6 底径6.9	脚部	底径最大径9.6 底径6.9	灰白色 (S6)	脚部は天目よりやや上部に、深溝と磨きあり。外面・内面共に同様にコナダ。内面深溝には放射状の痕跡がある。脚上は磨き、赤鉄がわずかに混じる。
図2-3-10	1区50	須恵器	F14 + 3類	脚部	杯底	底径2.9	灰白色 (S9)	底面は同様にコナダと赤鉄は磨き。赤鉄がわずかに混じる。
図2-4-1	1区50	土師器		壺	口縁部	底径2.3	灰白色 (S10B/2)	口縁内面はゆるやかにくぼむ。コナダ。
図2-4-2	1区50	土師器		壺	口縁部	底径3.1	紅い褐色 (L, 0106/4)	コナダによる面内磨削。
図2-5-1	1区3類	土師器		高杯	杯蓋 杯蓋 脚部	底径1.1	杯蓋内面 灰白色 (L, 517/8/1) 脚部 赤褐色 (S10B/2)	脚部は、コナダ。
図2-5-2	1区3類	須恵器		杯蓋	杯蓋部	底径1.3	灰白色 (S7)	杯蓋部の同様にケズリは、磨削が磨い。
図2-5-3	1区3類	須恵器		杯蓋	口縁部	底径1.2	内：灰白色 (S7) 外：灰色 (S6)	口縁部には光輝りするが、やや大きくおきめらぬ。磨は磨きない。コナダ。外面部赤鉄より上はナダの面にケズリ。
図2-5-4	1区3類	須恵器		杯蓋	口縁部	底径1.8	灰白色 (S7)	口縁部には光輝りするが、やや大きくおきめらぬ。磨は磨きない。コナダ。外面部赤鉄より上はナダの面にケズリ。
図2-5-5	1区3類	須恵器		杯蓋	受け部 杯蓋	口径 (13.2) 底径1.8	灰色 (S6)	底より上部は磨い。内外共に同様にコナダ。
図2-5-6	1区3類	須恵器		杯蓋	受け部 杯蓋	底径1.8	灰白色 (S7)	受け部は磨く可。
図2-5-7	1区3類	須恵器		杯蓋	杯底	底径2.6	灰白色 (S7)	内外面ともに同様にコナダ。外面に点線状の痕。
図2-5-8	1区3類	須恵器		高杯	杯底	底径1.9	灰白色 (S7)	底面は同様にケズリ。内面は同様にコナダ。
図2-5-1	2区3類	土師器		高杯	杯底	底径1.8	内：灰白色 (L, 379/1) 外：赤褐色 (L, 379/2)	杯蓋は広く浅く、口縁部は内反する。杯外面はケズリあり。磨はコナダ。
図2-8-2	2区3類	須恵器		杯蓋	口縁部	底径1.9	灰色 (S6)	口縁部には光輝りするが、やや大きくおきめらぬ。磨は磨きない。コナダ。外面部赤鉄より上はナダの面にケズリ。
図2-8-3	2区3類	須恵器		杯蓋	受け部 杯蓋	口径 (12.4) 底径2.4	灰白色 (S7)	同様にコナダ。杯蓋外面はケズリあり。
図2-8-4	2区3類	須恵器		脚部	脚部	底径3.3	灰色 (S6)	外面に1本の深溝。内外共にコナダ。
図2-11-1	2区3類	須恵器		杯蓋	杯蓋部	底径1.6	灰白色 (S7)	杯蓋部は同様にケズリ。その他は同様にコナダ。

第3章 総括

今回実施した本郷 I 遺跡の発掘調査では、調査した3か所の調査区でいずれも古墳時代後期と考えられる遺物が出土した。さらに、比較的調査面積の広がった1区では、切り合い関係をもつものの、埋土の特徴や出土遺物の年代から、ほぼ同時期（古墳時代後期）に埋設したと考えられる3条の溝を検出した。遺構の性格については、溝が調査区外にも延び全容が明らかでないため不明であるが、連続と続く当地域の歴史の一端をわずかながらも垣間見ることができたのではないだろうか。

また、工事対象範囲の大部分は、事前協議を通じて遺構に影響を与えない工法が採用され、遺跡を現地に保存することができた。

今回の調査成果は、今後、地域の共有財産として活かしていくと共に、周辺の文化財保護意識の啓発にも役立てていかねばならない。

報 告 書 抄 録

フリガナ	ホンゴウイイセキ							
書名	本郷I遺跡							
副書名	ファストフード店建設に伴う事前発掘調査							
巻次								
シリーズ名	西条市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	渡邊 芳貴							
編集機関	西条市教育委員会							
所在地	〒793-8601 愛媛県西条市明屋敷164番地 TEL (0897) 56-5151							
発行年月日	2011年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
本郷I遺跡	愛媛県西条市周布	38206		33° 54' 49"	133° 04' 48"	20091210 ～ 20091217	28 m ²	開発に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
本郷I遺跡	集落	古墳時代後期	溝、ビット	須恵器片、土師器片				
要約	本郷I遺跡は弥生時代以降、道前平野の中心となる周布地区に位置する。今回の調査は小規模であったため、遺跡の全容は明らかにできなかったが、1区では古墳時代後期に埋没したと考えられる溝を3条検出した。							

この報告書は、電子版のみ刊行しています。

西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集

本郷Ⅰ遺跡

—ファストフード店建設に伴う事前発掘調査—

2011年（平成23年）3月31日

発行 西条市教育委員会

愛媛県西条市明屋敷164番地